



彦島八幡宮社報  
第60号



至誠善行致祥の  
敬神生活を心がけましょう

宮司 柴田 宜夫

令和四年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

新型コロナウイルスの感染が確認されてから二年、生活環境も大きく変容しながらの日々をお暮らしたたのではないのでしょうか。古来より、各地に伝承されている祭典行事は、「疫病(えきびょう)、はやり病(やまい)」を退散、除くために斎行されてきたと言っても過言ではありません。私共の祭典行事も、「疫病(えきびょう)を除(のぞ)くべき祭(まつり)が、省略され除かれる」ことを余儀なくされました。しかしながら、しなやかに知恵をしばり、創意工夫をして「祭典厳修」につとめてまいりました。

私事で大変恐縮ですが、本年、還暦を迎えました。人生の長さは自分で決められません。今日という日は残りの人生のスタートの日と、この瞬間瞬間を大切に、一意専心、一生懸命、御奉仕申し上げます。何卒、変わらぬ御指導御鞭撻たまりますようお願い申し上げます。

さて、神社神道で大事にしていることは、「真善美」であります。幕末の歌人で「楽しみは」で始まる「独楽吟(どくらくぎん)」という和歌集を残された橘曙覧(たちばなのあけみ)さんは、「楽しみは 朝起きいでて きのうちまで なかりし花の 咲けるみるとき」と詠まれています。何気ない日常の暮らしに、感性を研ぎ澄ますことが、まさしく、「美」なのです。そして、「清く明るく直く正しく」という神様の心がけである誠の心で生活をする、「善きことを思い善きことを行う」というのが、「善」です。「積善の家には必ず余慶あり」という言葉がありますように、良い方向に運命がかわり、万事物事が進んでいくのは、やはり積善という「善き思い善き行い」、まさしく敬神生活ではないかと思えます。そのためには、どんなに苦しくても、「微笑み」を絶やさない、その笑顔が、必ず幸せにつながるという、「和気致祥(わきしやうをいたす)」を大切にしなければならぬと思えます。「至誠善行致祥(しせいぜんこうちしよう)」の敬神生活の心掛けを大切に、この新しい年も、幸せに満ちあふれた日々でありますように、心からお祈り申し上げます。

### 八幡宮からのお知らせ

どんど焼き 1月十五日(土・赤日)午前十時頃 忌火火入式

※荒天の場合は、翌日 1月十六日(日)に順延します。

正月飾りは、みかん・橙(だいだい)を外してご持参下さい。

執行後は来年まで受付致しませんので、予めご了承ください。

①鏡餅・ビニール袋・結納品・人形・仏具・民芸品等は一切お断り致します。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、ふるまい行事は中止します。





# 令和四年一月三日(木) 節分祭追儺式のお知らせ

★新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、豆まき餅まきは中止します。代わりに終日「福豆」を無料でおわかちします。時勢を鑑み福引大会・ぜんざい・お神酒の振る舞いの神賑行事も自粛中止します。ご理解ご協力の程を宜しくお願い申し上げます。

●節分祭追儺式(神事)は、従前通り午後五時四十五分開式にて執行します。

●厄祓も終日受け付けます。(予約不要)

●「福豆のおわかち」を終日実施します。

●花手水開催します。

●恵方巻を有志にて販売します。



巨大お多福が出現するかもしれません?!

※162号~180号(要点抜粋)を総集編としてお届けします。  
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

## 宮司プレス総集編



### 第一六二号(令和二年十一月十二日)

紅葉とは、秋に葉が紅に変わる事であり、また、その紅に変わった葉の事です。葉の細胞の中のアントシアンが増して、葉緑素が、分解するために起ります。ちなみに、「紅葉葉(もみじは)」という言葉は、「朱(あけ)」にかかる枕詞でして、紅葉は、紅の色も表しています。

明日は、新嘗祭を御奉仕申し上げます。私が、明日の新嘗祭で着装する装束の袍(ほう)は赤色、しかもその袍の裏地も濃い赤、さらに、その袍の下に重ねる単(ひとえ)も朱色です。これを「紅葉襲(もみじかさね)」といいます。明日の新嘗祭のお供え物載せる台(三方)も、「朱塗」です。江戸時代後期の伊勢神宮の神主さんで、神道家の度会延佳さんが、「正直者の頭(こうべ)に神宿る」と述べられたように、神様の好まれる徳目は正直です。私は、正直という徳目、神様への誠心を色に表すと、鮮やかな紅になるのではないかと思います。

宇宙の物質の二割強、エネルギーの七割強は未知なのだそう。当然ですが、人間は全知ではなく、現在の新型コロナウィルス感染症の拡大もわかりませんが、すべてを制御することは不可能です。そうであるならば、もっと謙虚に、生態系の一部であることをはつきりと意識をして、行動も慎重であるべきではないでしょうか。そして、未知なるものへの、「畏敬」「恐れ」「敬い」のミックスした心である、「畏み」という思いを大切にしなければなりません。その思いが、心の鏡を磨き、清々しい心で暮らす心掛けである「祈り」につながっていくのだと思います。明日の新嘗祭、誠の心の赤袍を身に着けるのですから、身も心も晴れ晴れと御奉仕申し上げ、一日も早いコロナ禍の終息を祈りたいと思います。

### 第一六三号(令和二年十二月十二日)

来年の干支は、辛丑(かのとうし)であります。辛は、「しん」と読み、刺青をずる把手のついた大きな針が、元々の形ですが、つらいつらいつらと読めるのです。丑は、「ちゅう」と読みまして、指を力強く曲げている形を表しています。辛は、また、新しいという意味があります。動物では牛が当てられています。牛は、今では、もっぱら食用として我々の暮らしにかかせません。古くは、交通の手段、あるいは、農耕作業のたすけとなるものでした。コロナウィルス禍、はたまた、拡大の歯止めのかからない世相、明年、ワクチン接種される運びです。まさに、新しい展開が期待されるのです。実は、「ワクチン」は、ラテン語で、雌の牛のことです。御周知のとおり、天然痘の撲滅に貢献したのも牛です。その牛にあやかり、一日も早い終息を心から願うものです。

さて、来年の干支にまつわる書初めは、「辛紐(こうちゅう)」と認めます。私の造語ですが、「幸」のなかに、「辛」がありますし、「紐」という字にも、「丑」があります。さらに、「辛」という字の「なべぶた」を大きく下に伸ばして、「一」そして、「二」を加えると、何と、「幸」という字になるではありませんか。「苦難は幸福の門」であります。しつかり、足を開いて踏んぱり、思いっきり、足を踏み出す、その道のりが、幸せへと結ばれるように、幸と紐を組み合わせましたのです。神社神道は、「つながりの宗教」です。大神様の御加護につながり、家族や大切な人々とつながり、癒され和みつつ、安らぎながら、幸多かりし日々へとつながる暮らしでありますように、心からお祈り申し上げます。

### 第一六四号(令和三年一月二十四日)

◇明治天皇様の御製に、  
「あらし吹く 世にも動くな 人ごころ  
いはほにねぎす 松のごとくに」  
と詠まれています。

新型コロナウイルスは、自分の命を守るためには、他者を避けるという、言葉は悪いですが、排他的な意識と行動をかき立てています。移動や集会の自由を奪われてしまっていることなど、さらに、不安や恐怖、さらに不信が連鎖する日々です。何か、ぎすぎすした空気におおわれて、運命共同体としての地域社会の暮らしの秩序が乱れていくような気がしてなりません。感染の拡大は、私たちの仕事や日常の暮らし方を見直す契機となっていないでしょうか。私共も、当たり前前に祭典を執行することが、困難になりました。昨年からは、なぜ、このお祭りを厳修しなければならぬかが、問われてまいりましたし、これからも、そこに向き合わなければなりません。襟を正して、降り積もる雪にも耐えて、岩にも根ざす「松」の強さ、勇気を忘れずに御奉仕申し上げたたく存じます。日本人の「強さ」「勇氣」は、いつも希望を見失うことのない、「神信心」だと思えます。今、「ないもの」を嘆くのではなく、「あるもの」に対して感謝を深めていく「心がけ」だと思えます。「生かされている」「幸せはいつも自分の心が決める」、その感謝の思いこそが、希望を失わない、「神信心」にほかなりません。「ないものねだり」でなく、「あるものさがし」という「神信心」で、新しく素晴らしいものをつかみ、つながり、その道のりが、「苦難は幸福の門」幸せへと続いていく日々でありますように、お祈り申し上げます。

第一六五号(令和三年二月二十日)

大自然を大切にし、人と人とのつながりを大切にしながら、前向きに人生を楽しむ、これが、神社神道の信仰の三本柱です。来る十二月二十三日の新嘗祭が、氏神祭の御加護により、きつと必ず、豊年満作、人々が笑み栄えて迎えることを信じて、予めお祝いをした祭典が、この祈年祭です。その予祝を現実のものとするためには、まず、「五風十雨」という、五日に二回穏やかな風が吹いて、十日に二回静かな雨が降るといふ理想的な天候でなくてはなりません。まさに、人の力の及ばない、大自然の恵みが必要不可欠です。そして、「プロセス(いとなみの手順、過程)」を省略することなく、手間暇かけることが重要です。人々との協力協調が大事になってきます。そして、なにより、立派な農作物を神前にお供えをするという大目標を達成するために、努力をおこたつてはなりません。「人事を尽くして天命を待つ」、「大難は小難に小難は無難に」と、神様が守ってくださることを信じる、「神信心」という希望を失わない、前向きな気持ちが大切です。

「このころを持って生まれてきた、これほど尊いものがあるか、そしてこの心を悪く使う、これほど相すまぬことがあるか、一番大事なことは、このころに、花を咲かせること」、これは、詩人の坂村真民さんの詩です。神社神道の信仰の三本柱を大切に、日々の暮らしが、予祝となるように、私共の心に、「神信心」という、ちいさな花を咲かせたいものです。

第一六六号(令和三年二月二十七日)

今年の節分は、百二十四年ぶりに、例年より一日早い、二月一日でした。ちなみに、三十七年前の昭和五十九年は、逆に一日遅い二月四日でした。太陽暦では、地球が太陽を一周するのは、三百六十五日五時間四十八分四十六秒なので、その端数を積んで、四年に一回、二月が二十九日となる閏年としました。その閏年と同じ感覚です。一年間を二十四の節分に当てはめ定期的な運用をしようとする、二年に少しづつ誤差が出てきて、ズレが生じます。二十八日しかない二月には、重儀というべき祭典が、四つもありました。前述の節分祭、建国祭、祈年祭、さらに、天長祭です。高千穂の地から遠い東の国を平定された神武天皇さまの偉業である建国、国の生い立ちに思いを馳せ、国家の繁栄を祈りましたのが、建国祭です。さらに、天長祭にて、今上陛下のお誕生日をお祝いし、陛下の御長寿、国家の隆昌、皇室の安寧を祈りました。吉田松陰先生は、「身皇国に生まれて皇国の皇国たるを知らずんば、何を以て天地に立たん」と書いておられます。この二月の四つの祭典は、日本が日本たる由縁、日本人としての自我覚醒、アイデンティティーの確立ともいえるべき重儀といつても過言ではありません。

明治天皇様は、御製(ぎよせい)に、  
 「敷島の 大和心の 雄々しさは  
 ことあるときぞ あらわれにける」  
 と詠まれておられます。まさに、「ことあるとき」のコロナ禍であればこそ、日本人の勇気を奮い立たせる時なのです。「日も早い終息、さらに、皆様の御自愛をお祈り申し上げます。

第一六七号(令和三年三月二十一日)

過日の三月十二日(木)の午前七時半より、東日本大震災復興祈願祭を斎行致しました。

上皇陛下上皇后陛下は、震災後の平成二十四年二月の歌会始の儀に、御製御歌を詠まれています。「津波来(こ)し 時の岸辺は 如何なりしと 見下ろす海は 青く鎮まると詠まれたのです。もちろん、その「青く鎮まる海」の岸辺からの陸地は、惨禍の景色が広がっているにも関わらず、「青く鎮まる」と詠まれたのです。「敬父慈母」という、厳しさと慈しみ、そして、優しさを併せ持つ大自然、その目に見えない大きな力をさとされたのだと思います。

「帰り来るを 立ちて待てるに 季(とき)のなく 岸といふ文字を 歳時記に見ず」と詠まれました。行方のわからない大切な人を岸辺で待っている人に思いを寄せられておられます。せめて、「岸」が、季節を表す言葉であれば、その季節を忘れないの、という、けつして風化させてはいけないということ、強く感じさせられました。そのようなことに思いを巡らしながら、真心を込めて御奉仕申し上げます。

東日本大震災から十年の節目の年を、新型コロナウイルス禍の最中に迎えることとなりました。しかも、今回の危機は、世界規模のものであります。今も、これからも、これまででの私共の生活様式、意識、心掛け等根本的に変わっていきます。われわれは、生態系の「員に過ぎないのであります。「恐れ」と「敬う」の気持ちのミックスした「畏む」という心を忘れてはならないのです。

コロナ禍の「日も早い終息を心から祈りたい」と思います。

第一六八号(令和三年四月十八日)

神社神道で大事にしていることは、「真善美」であります。花を見て美しいと思う心が美しいのであります。暮末の歌人で、「楽しみは「ではじまる「独楽吟」という和歌集に、和歌を沢山詠まれた橘曙覧さんは、「楽しみは朝起きいでて きうまで なかりし花の 咲けるみるとき」と詠まれています。世界的な数学者である岡潔先生も「数学とは野に咲く一輪のスマレの花を美しいと思う心だ」と述べられました。何気ない日常の暮らしに、感性をぎ澄ますことが、まさしく「美」なのではないでしょうか。そして、「清く明るく直く正しく」という神様の心がけである誠の心で生活をする、「善きことを思い善きことを行う」というのが、「善」です。「積善の家には必ず余慶あり」という言葉がありますように、良い方向に運命がかわり、万事物事が進んでいくのは、やはり、積善という「善き思い善き行い」ではないかと思えます。どんなに苦しくても、「微笑み」を絶やさない、その笑顔が、必ず幸せにつながるという、「和氣致祥」を大切にしなければならぬと思えます。

国際日本文化研究センターの磯田教授は、今の状況は、平安時代に酷似していると仰っています。平安時代も、大地震、大津波、そして疫病にみまわれたのです。先人たちは、どうやってその三重苦を乗り越えてきたのでしょうか。それは、「寛容性」と「従順性」だったそうです。何事も柔軟に受け入れて、耐え忍びつつ、日々是好日」と暮らしてきたのです。コロナ禍だからこそ、積善が、必ず幸せにつながるのだという、「至誠善行致祥(しせいぜんこうちしよう)」の日々を送りたいものです。



第一六九号(令和三年五月三日)

私共は、昨年から、まさに、「真坂」の時を迎えていまして、「二都二府一県」には、三度目の「緊急事態宣言」が発出されてしまいました。どのような生き方を心がければ、「下り坂」にならずに、「上り坂」になるのでしょうか。われわれの御先祖様は、いかなる危機にみまわれつつも、それを乗り越えて、今日の繁栄安全平和の世の中をつくりあげてこられました。特に、明治の御維新から、短い期間で、欧米列強に肩を並べられたのは、まさしく、大奇跡です。しかも、日清日露戦争という国難をも乗り越えて、得られた先進国の仲間入りでした。明治時代の日本が迎えていた、その「真坂」の時、明治天皇様は、御製に、

「世の中の 事ある時に あひぬとも

と、お詠みになられています。「おのがつとめむ ことな忘れそ」でありますから、今、与えられた、なすべき事に全力投球あるのみではないでしょうか。

第八十四代の天皇様で、建久八年、西暦千二百十年に、御即位された順徳天皇様は、「禁秘御抄」という御著書に、「先神事(まづしんじ) 後他事(のちあだしこと)、神事を先にし他事を後にす」と記されています。明治天皇様の仰つた、「おのがつとめむ ことな忘れそ」こそ、順徳天皇様の御著述された「先神事」ですから、「真坂」の時が、「上り坂」となりますよう、祭典厳修につとめて参る所存です。皆様方の日々の暮らしも、必ず、「上り坂」へと向かいますよう、お祈り申し上げます。

第一七〇号(令和三年五月二十七日)

五月は端午の節句です。家々では菖蒲を軒にふき、酒に入れ、湯に浮かべて入浴し、菖蒲の枕で寝ました。菖蒲は、神様がおうつりになる依代(よりしろ)と考えられ、いろいろな邪気や災いをはらうものと考えられています。この邪気をはらう菖蒲の力によって、日も早い、この「コロナ禍」の終息を願うものです。私共も、昨年来より、「マスク着用」、「手指消毒」、さらに、「三密の回避」、「集会移動の制限」という、「行動変容」を余儀なくされています。これからも、「行動変容」を受け入れつつ、辛抱強く生活することが必要です。特に、これからの生活にたいして、悲観的になりがちです。しかし、じつは、「悲観」は「気分」で、きつとよくなっていくのだという希望を持ち続けるという、「樂觀」は、「意志」なのだそうです。

ジャンバルジャンが主人公の、「あ、無情」のお話の作者は、ビクトルユゴーさんです。そのビクトルユゴーさんは、「未来には、三つの意味を有する」と述べられています。臆病者には、「不可能」、楽天家には、「未知」、そして、思慮深く勇猛果敢な者には、「理想」という意味を有すると述べられました。臆病者も楽天家も、その時の「気分」で、未来を考え、明るい未来の到来を見失っているわけです。今、「ないもの」を嘆く悲観ではなく、「あるもの」にたいして、「生かされている今」に感謝をする、きつと、神様が守ってくださいとうことを信じるといふ「意志」こそが、「神信心」なのです。「神信心」といふ日本人の心意気で、皆様方のこれからの暮らしが、きつと、明るい未来、理想に近づく未来でありますよう、お祈り申し上げます。

第一七一号(令和三年六月十四日)

御神殿の北側と東側の紫陽花の花が、水色やうす紅の花を咲かせて色鮮やかです。アジサイは、かつての日本では、あまり人気のある花ではありませんでした。それは、白から赤や青に次第に花の色を変えていくのが特徴で、「七変化」の別名があり、心変わり、無節操に通じるとされています。コロナ禍の一年と三ヶ月余りで、日本の社会は見たことのない姿となりつつあり、紫陽花と同じように「七変化」の様相を呈しています。この「変容」、「自粛」は、まさに、「利他」ではないでしょうか。コロナ禍の今こそ、利他の心が求められています。利他の追及が結局、自分自身も幸せになれる最善の道であるということ、を忘れて生活したいものです。作家の宮沢賢治さんは、「世界中のすべての人が幸福でなければ、幸せとはいえない」と仰いました。せめて、身近な大切な人の幸福のためにも、利他の心を大切にしたいものです。

東京大学吉見教授は、「コロナは幕末の黒船来襲だと思つたらよい」との厳しい見方をされています。過去は、未来を説く鍵でもあります。先人たちはその黒船来襲より、攘夷運動、さらに、明治維新という奇跡をおこしたのであります。自然や時代の変化の中に身を置きながら、自然を畏れ敬い、その状況に順応した、先人たちの生き様を今こそ、見習わなければなりません。そして、コロナ禍であればこそ、「雨の日は雨を聞きつつ 風の日には風を聞きつつよろこんで生きる」、知恵をしぼり、紫陽花のように、しなやかに、対応できる生活を送りたいものです。

第一七二号(令和三年六月十九日)

中国の易経に、「終日(あした)に乾乾(けんけん)、夕べに惕若(てきじやく)」とあります。「今日日頑張るぞ！」と生懸命に生きる、人事を尽くすわけです。そして「日が終わると、至らぬところを反省し、また明日は、今日よりはもっとよくしよう」、「足飛びにはいかずとも少しづつ前に進もう」と誓いを立て、神仏の御加護を願うのです。その「終日に乾乾、夕べに惕若」のお祭りが、明後日の「水無月の大祓式、来月三十日の夏越祭であります。私共では、この二つのお祭りを「夏越大祓」として、斎行しています。今年の上半年期、コロナ禍ということもあり、「葦船」に乗せて流してしまいたいことはかりだったのではないのでしょうか。しかしながら、「過去と現在を変えられないが、未来は変えられる」のであります。

新古今和歌集にも、  
「水無月の 夏越の祓 する人は千歳の命 延ぶと云ふなり」

と詠(よ)まれてるように、過去と現在、さらに未来をも清める、古き良き伝統の神事が、「夏越大祓」なのです。民俗学者で国文学者でもあり歌人の折口信夫は、このような日本古来のしきたりや、年中行事を「生活の古典」と呼ばれました。また、同じく民俗学者の柳田国男も、「敬神は要するに道徳である」と仰つておられます。「生活の古典」である、神事、しきたりを大切に、「要するに日本人の道徳」である敬神生活を心がけなければなりません。そのためにも、「終日に乾乾、夕べに惕若」という謙虚で寛容な心を忘れてはならないではないでしょうか。

第一七三号(令和三年七月十四日)

西洋文明の特徴として、よく語られるのが、はじめに言葉があったということです。「言葉は、神と共にあった、言葉は神だった」というキリスト教の聖書の言葉が、西洋の考え方を代弁していると言われるからだと思います。

それに反して、日本人は、言葉でなく形で自らを表現してきたのでありまして、形をまねるが、学ぶ事として捉えてきました。人の心は目に見えませんが、その見えない心を形にしたのが、じつは、言葉なのです。私供神職は、日毎、月毎、季節毎の祭典には、神様へ祝詞を奏上するのですが、これは、まさしく、心の祈りを形にした言葉です。

私は、常々、「三そう」を大切にしています。一つは、服装です。清潔な白衣と袴、祭典には定められた装束を着装するという事です。二つめは、人相、明るい笑顔の事です。そして、三つめは、これが一番大切なのですが、情操、心なのです。心が、乱れば、服装や身だしなみ、表情や言葉にも少なからず影響を及ぼします。

人の心の幸せに必要なものが、三つある事です。一つは言葉、もう一つは誠心誠意の態度と笑顔、最後は心だそうです。やはり、「三そう」と、「心は形をもとめ形は心をすすめる」という目標達成の心意気が大切なのです。そのためにも、「おこるな、いばるな、あせるな、くさるな、まけるな」、「おいあくま」の心がけで、このコロナ禍の夏を乗り切りたいものです。

第一七四号(令和三年七月二十九日)

今年を終戦七十六年を迎えようとしています。その戦後七十六年の最初の十年は、「キヤッチ アップ」の期間だったそうです。「敬神」という日本人の道徳を失わず、「生活の古典」ともいえるべき年中伝統行事を大切に日本人の特性、さらに、日本人らしさが失われなかつたのです。そのことが、良質な労働力につながり、いちはやく経済が回復し、「キヤッチ アップ」を成し遂げ、奇跡ともいえるべき戦後の復興の原動力となったのです。

作家で経済評論家であった堺屋太二さんは、「三番目の日本」を作ろうと提唱されています。一番目は、明治時代の目指した「強い日本」、二番目は、戦後の「豊かな日本」、三番目の日本は、「楽しい日本」だと提唱されたのです。私共の御先祖様は、自然や時代の変化の中に身を置きながら、自然を畏れ敬い、その状況に順応して、幾多の困難を乗り越えてこられました。雨降るもよし、晴れるもよしという、とらわれない心持で生活することを、「雨奇晴好」といいます。詩人の相田みつをさんも、「雨の日には雨の中を 風の日には風の中を」という詩を残されています。この「雨奇晴好」という心意気があればこそ、苦難を乗り越えられたのではないのでしょうか。「苦難」は、まさしく、「幸福の門」でもあります。堺屋太二さんの提唱された、「楽しい日本」になる心がけ、心意気なのではないでしょうか。コロナ禍が終息した、アフターコロナが、「楽しい地域社会、楽しい日本」となるためにも、二つの祭典に真心を込めて御奉仕申し上げたいと思います。皆様も、「雨奇晴好」の心意気で、「楽しい日々」をお過ごしください。

第一七五号(令和三年八月十日)

日本三大随筆の一つである、吉田兼好が書かれた「徒然草」には、「存命の喜び 日々には楽しまざらんや」と書かれています。死というものが、逃れる事の出来ない、恐ろしい憎むべきものであればこそ、今ある命を大切にしなければならぬ、そして、その事こそが、「存命の喜び」であると説いているのです。

八月は、鎮魂の月だと思っています。沢山の方々の尊い命が失われて、そのお蔭で、私たちは生かされています。六日の広島原爆投下の日、九日の長崎原爆投下の日、そして、十五日の終戦記念日。日本人は、死者への悲しみや弔い、魂への慰めを和歌や詩に託して、何百年も経て語り継いできました。それは、「人は、屍になつて死を迎えるのではなく、その人を知っている人が一人もいなくなつた時に死を迎える」と考えられてきたからだと思います。私たちも、決して忘れてはなりませんし、次の世代にも伝えていかなくてはならないと思います。

「生中死 死中生」、祈りを捧げ、生かされている者、死者も「浄化」されやがて、「昇華」されていく、これが、日本人の死生観でもあります。日本人の根源的な宗教観ではないのでしょうか。お盆は、生者と死者との間の魂の交感であり、親や親族、子供とのつながり、家そのもののつながりを再確認する瞬間でもあります。失つてはならない麗しい風習であらうと考えます。

人は誰でも、死の来ることを知っています。が、そんなに急にやってくるとは思っていません。しかし、死は、予期せぬ時、突如として来ます。今ある命に感謝し、生かされて活き活きと生きるという「存命の喜び」で、日々をおくりたいものです。御自愛ください。

第一七六号(令和三年八月二十五日)

私は、常々、神社神道は、「つながりの宗教」だと考えています。目にはみえない、大いなる何ものかという「サムシング グレート」ともいべき神様、大自然に感謝をし、御加護をいただき、そこに住んでいる人々と運命共同体を築いていく、これが、まさに繋がりであり、関係性といえるでしょう。神社神道で大切にしているのは、まず、大自然を大切にすること、人々とのつながりを大切にすること、さらに、前向きに人生を楽しむことだと思っています。夏目漱石は、最晩年に「則天去私」という言葉を残されました。小さな私を去って自然に委ねて生きることなのです。まさしく、大自然に身を委ね、私利私欲をかなぐり捨てて生きていくこと、それこそが、利他的行動といえるでしょう。幸せな人生を送るためには、やはり、「則天去私」、「利他的行動」を心掛けることが大切なのではないでしょうか。中国の儒教で尊重される五種の経典の一つである「易経」に、「復はそれ天地の心を見るか」とあります。「復」とは、繰り返すという意味です。何回も何回も繰り返す行は、天地の心そのものと書いてあるのです。大自然のいとなみは、気の遠くなるような長い年月、二分の狂いもなく繰り返されてきました。繰り返す行の中にこそ、天地の心に通じる尊さがあるというのです。同じことを黙々と繰り返し行っていたら、そこに大きな徳力があらわれる、大自然のいとなみは、そのことを教えてくれています。「行動変容」が、一年半続いています。が、大自然のいとなみからしたら、瞬きをするくらいの一瞬にしか過ぎません。「復はそれ天地の心を見るか」、この言葉を反芻しつつ、黙々と利他的行動である「行動変容」の日々を過ごしたいものです。



第一七七号(令和三年九月十日)

一年で一番目に美しいとされる「お月見」、何という月で、いつ見ることが出来るかご存知ですか。もちろん「番美しい」とされる月は、「仲秋の名月」で、旧暦の八月十五日で、今年九月二十日です。二年で一番目に美しいとされる月は、「十三夜月」で、旧暦の九月十三日、今年、十月十八日です。昔から、この両方の月を見て、愛でないと「片見月」といつて縁起が悪かったそうです。「仲秋の名月」は、音楽を奏で、宴を催す宮廷貴族の年中行事でした。それに対して、「十三夜月」は、月に宿るとされた水の神様に、里芋や果物等をお供えし、感謝する、庶民の信仰の行事でした。その感謝を捧げる行事の、「十三夜月」を忘れないために、「片見月」といったのだそうです。お月見のお供えで欠かせないのが、「お団子」と「スキ」です。この「お団子」は、「お芋」にみたてであるそうですし、「すすき」は、黄金色の頭を垂らす、豊年満作の稲穂のことだそうです。お月見は、秋の夜長に、豊かな実りをあらかじめお祝いし、あらためて、お祈りを捧げる、「予祝」の行事だったことを忘れてはなりません。「片見月」ならぬ、「片手落ち」となってしまう。

坂村真民さんの詩に、「影あり 仰げば月あり」とあります。不安や恐怖のつるるばかりの日々ではありませんが、美しい月の光で、不安や恐怖の心が、清められます「処方箋」となります。ことをお祈り申し上げるしだいです。コロナの治療薬が完成する年末年始には、今と違った景色や雰囲気になっている事を信じて、「仰げば月あり」、希望を見失うことなく過して参りたいものです。

第一七八号(令和三年十月二十二日)

皆様は、「神」の語源を御存知(ごぞんじ)ですか。元禄十五年に刊行された神道名目類聚抄(しんとみょうもくろいじゅうしょ)には、「優れたる徳のありて畏きものを総て神という」と書かれています。その優れたる徳のあるものは、大自然、人や鳥獣の類、さらには、自然現象をふくめてのことだと書かれています。そのことを、吉田神道の吉田兼邦は、

「天地の 中にみちたる 草木まで  
神の姿と 見つつ恐れよ」

と、わかりやすく詠んでいます。さらに、大正十三年に刊行された神祇辞典には、神の説明について、五つの説が記載されています。私なりにまとめてみますと、要するに、神は「上」で高い上の所にあつて、その威霊の測り知れないものであります。そして、自然界において超人的な霊力や威力のあるものを神として崇めるのです。

後醍醐天皇様も、御製に、

「みな人の 心をみがけ ちはやふる  
神の鏡の くもるときなく」

と詠まれておられます。神の鏡が曇る時がないように、人も心を磨いて変な色にそめるな、曇らせてはならない、そのような心を持つてようつとめなさいと説いています。

この一年半、新型コロナウイルス感染症に振り回されながら、生活の環境は大きく変わりました。しかしながら、私共にとりまして、変えてはならないのが、御先祖様から受け継いできた祭典の厳修です。その祭典の厳修によつて、世の中の景色が、明るく見える、神の別名である「明見(あかみ)」となるよう願うものです。

第一七九号(令和三年十一月五日)

祈りの語源は、「齋(い)宣(の)る」なのだそうです。「齋」は、身も心も清めるということです。「宣る」は、つつしみて、神様に願いを申し上げることです。「祈りは欲を浄化する」という言葉が示しているように、身を削ぐ思いで、心身を清め、祈願申し上げるのが、祈りなのではないでしょうか。

神社神道は、「つながりの宗教」であると、日々考えておりますが、神様につながり、大自然の恵みにつながり、そして、大切な人々とつながり、「生かされている」のです。そう思えば、大自然との向き合い方、日々の暮らしも善き方向へ進んでいくような気がしてなりません。じつは、世界的な物理学者であるアインシュタインも、そのような感情を「宇宙的宗教感情」と仰っています。

詩人の坂村真民さんは、「大切なのは かつてもなく これからもない 一呼吸呼吸の今である」という詩を残していらつしやいます。臨済宗の臨済録(りんざいろく)に、「隋処(すい)主作(しゅ)しよととなれば)立所皆真(たつところみなしんなり)」と書かれています。「今、与えられていることに全力をつくしなさい、きつと、必ず、上手くいきますよ」という意味です。私も、祭典厳修につとめ、しつかりと、「齋宣(い)のり」を捧げてまいります。

皆様方も、これからも、いまま少し辛抱が必要ですが、一呼吸一呼吸の今、与えられていることに全力を傾けましょう。きつと、必ず、素晴らしい日々となりますように。

第一八〇号(令和三年十一月二十一日)

今、グローバル commons(地球の共有財産である環境エネルギー・公衆衛生のこと)が、危機的状況下であり、世界的な排出ガスの削減の問題は、環境とエネルギーに関わることですし、特に公衆衛生に関しては、新型コロナ感染症の脅威(きょうい)にさらされています。国連は、令和十二年、西暦で申し上げますと、二〇三〇年までに、国際社会共通の目標、持続可能な開発目標(SDGs、エス デイ ジーズ)を設定しています。大自然は、刻々と移り変わりますが、それが、常であり、当たり前のことです。そのようなときには、日々のかすかな変化は気付きにくいものです。しかしながら、国際社会に共通する新型コロナ感染症の拡大、この二年間のコロナ禍は、この共通目標を再確認する機会になっています。私は、日本でも、このコロナ禍、けつして忘れてはならない、未来永劫守り伝えなければならぬ、いわば日本人のSDGsともいふべき、「日本人のオプリージユ」が、発揚されたのではないかと思います。

「オプリージユ」とは、感謝の心・公德心という意味です。日本の事を「大和」と申しますけれども、大和とは、大いなるやわらぎであり、人のことを心から思う真心であり、思いやりにほかなりません。

いまま少し、誇り高き、「日本人のオプリージユ」を駆使した暮らしを心掛けなければなりません。そして、「今日という一日は残りの人生のスタートの日」、瞬間瞬間を大切に、今生懸命に生き生きとお暮らしください、  
「明らむ」、光に満ちた明るい日々でありますようにお祈り申し上げます。



本宮主たる祭典厳修報告 \*毎月・二五日月次祭

令和三年(月)十二月

- 一月 一日 初太鼓 歳日祭  
三日 元始祭  
七日 人日節句祭  
十五日 どんと焼き
- 二月 二日 節分祭追儺式  
十日 紀元祭建国奉祝祭  
十七日 祈年祭  
二十三日 天長祭
- 三月 三日 上巳節句祭  
二十日 春季祖霊祭
- 四月 一日 勸学祭  
十五日 彦島地区戦没者慰霊祭  
二十九日 昭和祭
- 五月 五日 立夏更衣祭並びに端午節句祭
- 六月 三十日 水無月大祓式
- 七月 二十九日 夏越大祓式・菅拔神事  
三十日 夏越祭御神幸祭(陸路のみ)
- 九月 二十三日 秋分祭秋季祖霊祭
- 十月 十七日 神嘗奉祝祭  
二十二日 秋季例大祭前夜祭  
二十三日 秋季例大祭本殿祭  
二十四日 秋季例大祭御神幸祭  
サイ上り神事・潮搔神事
- 十月 三日 明治祭  
七日 立冬更衣祭  
十五日 七五三祭  
二十三日 新嘗祭
- 十二月 五日 大注連縄奉製・煤払式  
三十日 御供米料奉納奉告祭  
大祓式  
新守札清祓式  
除夜祭

以上、氏子崇敬者企業団体の皆様方のご奉賛ご理解により主たる祭典をはじめ多くの年間祭祀行事、八幡宮奉護がなされておりますこと心より感謝申し上げます。

令和三年 新年御供米料 奉獻会社ご芳名

- (株)中冷
- 農水フーズ(株)
- チヨダウーテ(株)下関工場
- (有)枝村ドラム工業所
- (株)大伸運輸
- (株)彦島造園
- (有)上釜電機商会
- (株)副田工務所
- (有)フジタ石油
- (株)サントー
- 香洋工業(株)
- 桃歳水産(株)
- (有)ライフクリーニング
- 古賀産業(株)
- テラーしばた
- 大久保本店
- 和日電機(株)
- 合同会社光臨
- 下関酒造(株)
- (有)三宅商店
- (有)平田工業所
- 合資会社三池屋
- (株)下関ユアサ建材
- (有)百合野
- (有)岩原クリーニング工業所
- みなと不動産
- (有)南国シテイタクシー
- (有)ライス&ミルク上村
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- (株)室田組
- 関門三協工業(株)
- 松田内科クリニック
- (有)才力タ工房
- (株)共立機械製作所
- (株)原工務店
- 高保工業(株)
- (有)植田商会

令和三年二月二日 節分祭 御協賛会社御芳名

- 下関三井化学(株)
- 彦島製錬(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- オルネクスジャパン(株)下関工場
- 池田興業(株)下関支店
- 三菱重工業(株)下関造船所
- サンセイ(株)下関工場
- (有)前田造船所
- 日新リフレテック(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 協立運輸商事(株)
- 西和建工(株)
- ALG合同会社
- ジャパンマリン(株)
- 青木鉄工(株)
- (株)田原工務店
- (株)ユキテクノ
- (株)大庭工務店
- タナカ機工(有)
- 花のタムラ
- (株)山口銀行彦島支店
- (株)山口銀行彦島支店
- (株)西京銀行彦島支店
- (株)西中国信用金庫西山出張所
- (株)ファミリマート迫町店
- (株)ナカハラプリンテックス



福豆のおわかし千袋や(株)ナカハラプリンテックス様より奉納戴きました約五百本のシャンメリーの撤下、更には花水手や有志による恵方巻の販売などでコロナ禍での工夫した節分祭となりました。

令和三年七月三十日 夏越祭 御協賛会社御芳名

- 下関三井化学(株)
- 彦島製錬(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- 西中国信用金庫
- 三菱重工業(株)下関造船所
- サンセイ(株)下関工場
- 日本歯科薬品(株)
- 日新リフレテック(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 山口県漁業協同組合彦島支店
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店



奉賛会による茅の輪奉製



夏越大祓菅拔神事



御神幸御旅所祭

二年ぶりとなる大掛かりな茅ノ輪の奉製や陸路のみの御神幸祭の執行が叶いました。感染拡大防止の為、御旅所の参列人数の制限や、中止を余儀なくされましたが、皆様方のおかげと工夫をもちまして滞りなく斎行できました事に感謝申し上げます。



秋季例大祭『サイ上り神事』齋行

令和三年十月二十四日(日)

フォトメッセンジャー 中野英治

昨年の秋季例大祭は、新型コロナウイルス感染防止の為、神事と「サイ上り神事(楼門内)」のみに縮小され、非公開で厳かに執り行われました。今年も、関係者による入念な事前打合せと下準備により、御神幸祭が行われることになりました。

彦島自治会代表者で組織する「奉賛会」の御協力のもと、下関三井化学(株)の厳重な警備体制に見守られる中、工場内の御旅所までを往復し、広場で柴田宜夫宮司による祭典がしめやかに進められました。

参列者は、間隔をあけた椅子に腰を掛けて、厳肅な神事を見守っていました。

「サイ上り神事」は広場の舞台で一般公開され、昨年引き続き「獅子人」役を園田貞治さんが務めました。

(本来は子供ですが、コロナ禍で代役に抜擢)。

五十九年ぶりの舞は、遠い昔に思いを馳せながら、コンクリート床を物ともせず、白足袋一つで盛り砂に立てた榭の周りを何度も飛び跳ねていました。その後、鎧で身を固めた武者姿の河野通次役が登場し、盛り砂を突く所作を繰り返し、最後に「サア揚らせ給う」と締めくくりました。彦島の伝統ある祭りと、人々との深い歴史を感じた祭典でした。

来秋もまた、彦島八幡宮でお会いしましょう。

御神幸祭



御旅所巡行を終え、柴田宜夫宮司による祭典が執り行われた。



御旅所までは、御神輿を車で乗せて巡行

サイ上り神事



舞役の可知重成氏



獅子人役の園田貞治氏





昭和30年の境内の様子

八幡さんの思い出写真



現在の境内の様子

今号は昭和三十年、境内写真の一枚です。当時の拜殿や東西回廊は現在の銅板ではなく瓦葺で、参道石畳が未だ整備されていませんでした。



丸山正博氏 奉納

宮司肖像画と河豚絵画奉納

丸山正博氏に正服を着装した衣冠姿の宮司の肖像画と、松村久氏に全国で唯一の河豚専門の卸売市場 南風泊市場の氏神様が当宮である御神縁から河豚の絵画を奉納賜りました。



松村久氏 奉納

公式Instagram



HIKOSHIMAHACHIMANGU.OFFICIAL

是非フォローして、#彦島八幡宮など、#(ハッシュタグ)を付けて多くの投稿をお願いします!!



龍



鳳凰



本殿



梅



竹



松

八幡さんの神社彫刻

御神体を奉安する社殿の一番奥にある本殿(神殿)板壁に施されている彫刻をご紹介します。



# 伊勢の神宮と神宮大麻

## 「神宮大麻」頒布開始から百五十年

明治天皇の思召しにより、明治五年から開始された日本国の総氏神 お伊勢さまの御神札「神宮大麻」頒布から本年百五十年の節目を迎えます。「神宮大麻」の歴史は古く、伊勢の「御師」と呼ばれる神職が祈禱し祈願をこめて各地へ赴き頒布していた「御祓大麻」に由来します。

現在の神宮大麻は伊勢の神宮で奉製員により一体一体心を込めて奉製され、年末に氏神様の御神札と共に全国の神社で頒布されています。日毎朝夕に、神様にご先祖様に感謝し祈りを捧げる日本人の暮らしの原点が御神札を祀る事にあります。しかし近年は、「実家に祀られているから」や「粗末になるから」といったように、殊更若年層世代から神宮大麻奉斎に消極的な意見が多く寄せられるようになりました。コロナ禍になり様々な行動変容を余儀なくされ、暮らしぶりも様変わりしました。人との接触機会の半減をはじめ非日常の生活が長引き、不安や寂しき、且つ又心のより所を失いかけた人々も少なくないはずで、そのような中で、一人暮らしであろうと、核家族であろうと多様な家庭でも、多くの方が神宮大麻をお祀りしていただく節目の年であって欲しいと願うばかりです。

伊勢の神宮は「日本の守り神さま」「心ふるさと」であります。御神札を通して「お伊勢さま」をご自宅から心のより所と感じ、お参りする暮らしを始めてみませんか。コロナ禍で疲弊した心身を善き方向へ必ずお導き下さいます。実践してみようとお考えの方は、是非一度、氏神様、崇敬する神社様、お近くの神社でお尋ねになって下さい。目に見えない大いなる力を「お伊勢さま」から拝受しましょう。



折に触れご参拝されるご一家

# 花手水舎へ手水鉢が色とりどりの花で鮮やかに



コロナ禍になり感染拡大防止の為に、手水舎の柄杓を撤去し流水にてお清めしていただくようにし改修し、一昨年からコロナ禍特例の手水舎として、コロナ収束の願いを込めて季節ごと色とりどりの花を手水鉢に浮かべ華やかに演出した花手水舎を一目見ようと、本年も多くの皆様方にご参拝ご拝観賜りました。

【手水舎改修工事】 ㈱副田工務所様奉納

\*花手水：神道では、古来水がない場合に花や草木についた露で手水として清めの儀式を行っていました。又、雪を用いた雪手水の場合もありました。





# 舟島神社の再建について

彦島自治連合会 会長 一見勝敬

皆様 新年明けましておめでとうございます。

私たち彦島自治連合会は、彦島八幡宮奉賛会のメンバーとして、彦島八幡宮の大神様にご奉仕させて頂いておりますが、同時に巖流島に鎮座する舟島神社を主祭させて頂き、毎年佐々木小次郎命日の直前の土曜日に例祭を斎行させていただいております。

なぜ彦島自治連合会が主祭することになったかにつきましては、ここでは省略させていただきますが、その舟島神社の祠が三年前の台風を主因として破損し、放置されたままの状態となっております。

下関市の観光の目玉であり、全国的にも名高い巖流島でこのような状態をこれ以上放置しておくことは出来ません。

今年度に入り、彦島自治連合会では再建に向け種々検討を重ねておりますが、修理用の資機材を運搬する台船を巖流島の何処に係留し、資機材をどの様に陸揚げするかで難渋しております。

これが解決すれば、何とか再建計画は前に進めるものと思っております。

ただし、再建計画がまとまれば、次に再建費用の捻出をしなければなりません。自治連合会にはそのような資金は有りませんので、皆様のご寄付にすぎないか有りません。自治連合会にはどうか、その際には皆様のご協力を賜りたく、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



## 八幡様の知恵袋

懸(かけ) 税(ちから)

悠久の太古より連綿と続く  
祈りと感謝を捧げてきた瑞穂の国の米作り

「懸税(かけちから)」とは、伊勢の神宮で毎年十月に斎行される最も由緒が古い『神嘗祭』と称される祭祀に先立ち、天皇陛下が皇居神田にてお育てあそばされた御稻穂を御初穂として御献進になり、内宮外宮両御正宮の内玉垣に特別に紙垂をつけた御稻束「奉懸」に対して、全国の農家が奉献した稲穂の稲束の事です。

神宮では天皇陛下と国民の収穫奉謝の真心が一体となった美しい光景が十月から十一月にかけて新穀を感謝する時期に見られます。これに倣い、全国の神社の御神前にも懸税がかけられるようになったと言われています。



## 訃報

彦島八幡宮責任役員総代長

石崎 幸亮氏 (令和三年七月十五日逝去)

彦島八幡宮奉賛会行事委員長

松崎 修身氏 (令和三年七月二十四日逝去)

彦島八幡宮敬神婦人会顧問

百合野 七重氏 (令和三年十一月十四日逝去)

長年にわたり当宮の要職を務められ御神徳の宣揚に一方ならぬご尽力を賜りました。茲に生前の御功績を偲び謹んで衷心より哀悼の意を表しますとともに御冥福をお祈り申し上げます。

## 異動報告(神社役員)

令和三年九月二日付

【昇任】責任役員総代長

和田 博

【昇任】責任役員

小熊坂 孝司



# 令和4年(壬寅)厄年・年祝表

(年祝)

上寿祝	大正12年生(100歳)	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正13年生(99歳)	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和8年生(90歳)	卒は略字で卒と書き九十と読む。
米寿祝	昭和10年生(88歳)	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和18年生(80歳)	傘は略字で傘と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和21年生(77歳)	喜は草書で喜と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和28年生(70歳)	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和37年生(61歳)	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

※節分祭(2月3日)までに厄祓をお受けしましょう。

(厄年)

性別	年齢	前厄	本厄	後厄
男	25歳	平成11年生(24歳)うさぎ	平成10年生(25歳)とら	平成9年生(26歳)うし
	42歳	昭和57年生(41歳)いぬ	昭和56年生(42歳)とり	昭和55年生(43歳)さる
	61歳	昭和38年生(60歳)うさぎ	昭和37年生(61歳)とら	昭和36年生(62歳)うし
女	19歳	平成17年生(18歳)とり	平成16年生(19歳)さる	平成15年生(20歳)ひつじ
	33歳	平成3年生(32歳)ひつじ	平成2年生(33歳)うま	昭和64年生(34歳)へび 平成元年生
	37歳	昭和62年生(36歳)うさぎ	昭和61年生(37歳)とら	昭和60年生(38歳)うし

## (八方塞がり)

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星(方位)に囲まれた状態である**八方塞がり**です。不安定な年とされ、より注意をしなければならぬ年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**五黄土星**の方が該当致します。(以下に表記)

昭和7年、昭和16年、昭和25年、昭和34年、昭和43年、昭和52年、昭和61年、平成7年、平成16年、平成25年

(三月金神様の方位)三月金神様(三月ごとに方位を変えられる神様)の方位への移転・新築・増改築・開店等々留意しなければなりません。

北	令和3年11月15日～令和4年1月31日	東	令和4年2月1日(旧元日)～令和4年4月30日
南	令和4年5月1日～令和4年7月28日	西	令和4年7月29日～令和4年10月25日

(七五三祝)

髪置祝	令和2年生の男女(3歳)	髪を伸ばし整え始めること。
袴着祝	平成30年生の男子(5歳)	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解祝	平成28年生の女子(7歳)	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

## (天赦日一覧)

1月11日(一粒万倍日)、3月26日(一粒万倍日)、6月10日(一粒万倍日)、8月23日、10月22日、11月7日

祈願祭(お祓い)は数え年でお受けしましょう。「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

## 安産祈願祭・腹帯清祓のご案内 (令和4年の戌の日)

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められ、県内外よりご参拝いただきます。ご持参頂いた腹帯(マタニティガードル)に当宮の「安産守護」の印を押印させていただきます。



1月 9日(日) 赤口	4月 3日(日) 大安	7月 8日(金) 先負	10月 12日(水) 先勝
21日(金) 赤口	15日(金) 大安	20日(水) 先負	24日(月) 先勝
2月 2日(水) 友引	27日(水) 大安	8月 1日(月) 仏滅	11月 5日(土) 先負
14日(月) 友引	5月 9日(月) 赤口	13日(土) 仏滅	17日(木) 先負
26日(土) 友引	21日(土) 赤口	25日(木) 仏滅	29日(火) 仏滅
3月 10日(木) 先負	6月 2日(木) 友引	9月 6日(火) 赤口	12月 11日(日) 仏滅
22日(火) 先負	14日(火) 友引	18日(日) 赤口	23日(金) 赤口
	26日(日) 友引	30日(金) 先勝	

★お子様の命名書、宮司が浄書致します。お気軽に社務所迄お申し出ください。授与された命名の掛け軸をご持参下さい。お持ちでない方も、半紙や色紙等に謹筆致します。

発行所 彦島八幡宮社務所  
〒411-0001 静岡県彦島追分五丁目十二番九号  
FAX 0549-266100  
TEL 0549-266101  
ホームページ http://www.hikoshima-grunet

編集者 山柴 徳夫  
発行者 山柴 徳夫  
印刷・株ナカハラプリンテックス  
令和四年一月一日